

RR-16「歴史に学ぶ「女性と復興」～昭和三陸大津波と家族、共同体～総集編Ⅱ」

課題提案者：岩手女性史を紡ぐ会

研究代表者：宮古短期大学部 植田眞弘

研究チーム員：伊藤工三子、植田朱美、祇園寺広子、花坂清美、山口照子（岩手女性史を紡ぐ会）

竹村祥子（岩手大学）、梶座久子（ウイメンズカウンセリング富山）、柳原恵（お茶の水女子大学）

<要 旨>

本研究では、引き続き、何度も大津波によって甚大な被害を受けている岩手県三陸沿岸地域の漁業を生業とする特殊な地域共同体の中であって、嫁としてあるいは妻、母として、どのように生きてきたのかを浮き彫りにすることを課題として取組んだ。今回は特に、昭和8年の三陸大津波を経験された方々に対する聞き取りを中心に、そこから東日本大震災からの地域社会の復興に向けた取組にとっての教訓を探った。三陸大津波は被害の甚大さだけでなくその後の戦時体制への移行という特殊な事情もあり、聞き取りは興味深く、また私たちにとって多くを学べる内容であった。「大震災と戦争の犠牲者として悲惨な境遇のなかで耐え忍んできた女たち。」という思い込みは裏切られた。津波からの復旧・復興に向けて「自己肯定感」に支えられて粘り強く活動しただけでなく、徴用・徴兵されて不在であった男たちに代わって共同体や家族を経済的にも支えてきた力強い女性たちに出会うことができた。そして、こうした女性たちの主体性と自立性は、漁村共同体という特殊なコミュニティで生きていく女性の知恵でもあったように思われる。こうした成果は、与えられた機会を活用して発信していきたい。

1 研究の概要（背景・目的等）

東日本大震災において、女性の被災状況の特殊性を体験また見聞するなかから、「岩手女性史を紡ぐ会」では「歴史に学ぶ女性と復興」のテーマが課題になった。

2011年当時「岩手女性史を紡ぐ会」では、「昭和の岩手女性史年表」を作成途中であったが、昭和8年三陸大津波を重点項目としないで通り過ぎてしまったことに気づき、振り返る必要性を感じたことから当協働研究に着手することを決定した。同時に、当面の東日本大震災からの復興についての手がかりを歴史から学ぶことも視野に入れた。

2 研究の内容（方法・経過等）

当協働研究『歴史に学ぶ「女性と復興」～昭和三陸大津波と家族、共同体』は、昭和三陸大津波(1933年)の被災と復興を、沿岸女性のくらしと労働に視座を据える研究として、平成24年度にスタートした。

平成24～25年度、「岩手女性史を紡ぐ会」会員および各専門分野の協力研究者は、当時の資料調査と沿岸生活者への聞き取りを重ねた。平成25年度には、前年度との成果を合わせて協働研究記録集（内部用）を作成。さらに平成27年度は、「津波をくつがえす～岩手おらほのおなごたち」（岩手女性史を紡ぐ会・会誌）として小冊子を刊行した。

各会員と協力研究者による論考とチームの座談会記録および解説。さらに聞き取り調査のうち、すでに他界された6人の女性の記録である。以下、目次掲載。

『津波をくつがえす～岩手おらほのおなごたち』

はじめに 植田 眞 弘

第1章 昭和三陸大津波とその時代

1、1933(昭和8)年3月の岩手日報の新聞記事から見た「女性と震災」 柴田 温子

2、昭和三陸大津波の発生から復興に至るまで 長谷川 美智子

3、「家制度」と女性をめぐる法律～昭和三陸大津波の頃～ 植田 朱美

4、昭和三陸大津波と漁村のジェンダー 柳原 恵

5、昭和8年津波サバイバーの女性たちから学んだこと 梶座 久子

第2章 女性たちのライフヒストリー

「三度の津波と戦争を越えて」（聞き取りの記録）

1、「こんなはずじゃなかった！」1ヶ月床に就いて悔やんだ101歳 浜登キヨさん（山田町田ノ浜）

2、戒名を抱いて、3人の子を育てた女将 赤沼ヨシさん（宮古市田老）

3、何でも自分でやらなければ、どうにもならない 小本ヨシエさん（宮古市蛸ノ浜）

4、御詠歌に祈りをこめて、大槌に生きる 鹿嶋ハマさん（大槌町小槌）

5、札幌から山田町に来た、お嬢さん 東海林登志さん（山田町豊間根）

6、一流の芸に生き、現役をつらぬく 伊藤艶子（藤間千雅乃）さん（釜石市）

<追悼> 他界した女性たちに学んだこと 植田朱美

第3章 座談会の記録

1、「聞き取り調査や資料整理をするなかで発見したこと、考えたこと」 解説 竹村 祥子

2、研究チーム座談会（2014年2月9日、21日）

むすび 植田 真弘

3 『三陸の海とともに～岩手おらほのおなごたち』

今年度は、「歴史に学ぶ女性と復興～昭和三陸大津波と家族、共同体～総集編Ⅱ」として、11編の聞き取り調査をまとめた。2組のご夫妻が含まれる。

三陸の海は静かで美しく、沿岸の町、田老・宮古・山田・釜石・大槌に豊かな漁業をもたらしてきた。また沿岸は、漁港と鉾山にも恵まれ、田老鉾山や「鉄の町釜石」が栄えた。

けれども同時に「100年生きたら、3度は必ず津波に遭う」と言い伝えられてきた土地でもある。

聞き取り調査では、1896（明治29）年の津波で両親を亡くした後の体験「昭和8年の津波の後、家の跡取りとして生きた女性」（田畑マンさん）や、両親から伝えられた教訓「三十一文字に詠った半生」（中村ときさん）が語られた。1933（昭和8）年の津波は、全員が体験して、家を流される最初の経験者もある（「一家を行商で支えて40年」石崎ユウ・太郎さん夫妻）。この頃、家と共同体の継続方法が大きく浮かび上がってきている。

戦時中、釜石では艦砲射撃を受けて逃げ延びた体験を伝えた「砲弾の雨が降る記憶を伝えるために」（千田ハルさん）と女子挺身隊の体験者が3名（「3度の津波と3度の結婚」昆ミカさん、「3・11の後に手仕事の楽しみが生まれた」鈴木京子さん、「家族のために生きた半生」工藤陽さん）あった。夫の召集も経験した（「花とともに70年」吉田タカさん他）。

戦後の食糧その他の困難な状況を抜けて、さらに1960（昭和35）年、チリ津波で2度目の家を失くし、2011（平成23）年、東日本大震災では、ほぼ全員が被災者で6年間仮設住宅暮らしが続いている方も多し（「津波が通ったあと3軒のわが家が焼けた」松本キワ・永次郎夫妻他）。

4 概要

平成24年度からの協働研究聞き取り調査で、私たちは「貧困と封建的家の無力な犠牲者としてではなく、災害を切り抜け、復興を担った主体として」（柳原恵「昭和三陸大津波と漁村のジェンダー」『津波をくつがえす～岩手おらほのおなごたち』所収）生きる女性たちに出会った。

そこで「彼女たちは2011年東日本大震災でも、生き延びてさらに周囲に力を与えた。自己尊重感が命を守り、未来につながることを示し」（梶原久子「昭和8年津波サバイバーの女性たちから学んだこと」同上）てくれた。

また私たちは、昭和三陸大津波の体験談と復興資料から4点の共通認識を得た。

1点目は、第二次世界大戦前の三陸沿岸で育った女性が、人生の分岐点で「従属的な選択」にならざるを得な

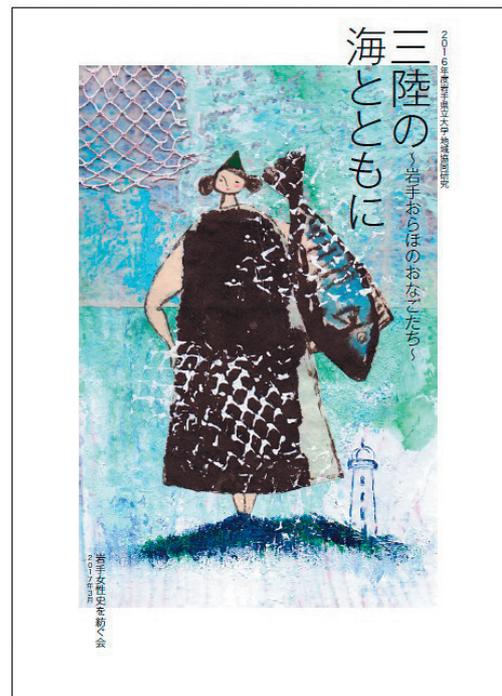
かったという先入観とは違って、「生き抜く知恵と主体性とバイタリティー」を発見したこと。

2点目は、昭和8年の津波後の避難生活の支援や復旧に当たって、「学校や教育機関の役割」が大きかったこと。

3点目には、被災して生業や家族成員の生活が一転しても、家族を再構成し、生活（生業）を続けていく家族戦略としての養子、婿取りがあり、「家産」所有も、当該地域で生活することの条件の一つだと確認したこと。また女性は、仕事の場を自分で選び、結婚後の経済的自立を獲得する例もある。

4点目は、漁業生活の特徴として、常に命懸けの労働のため男はお客様扱いという家族生活の中の暗黙の了解による女性の自立性である。（竹村祥子「聞き取り調査や資料整理をするなかで発見したこと、考えたこと」同上より）

さらに『三陸の海とともに～岩手おらほのおなごたち』をまとめて気づいたことは、ほとんどの語りに「愚痴・後悔・非難」が聞き取れなかったこと。多くの困難な半生の語り口は力強く、明かるかった。



5 今後の取組み

2017年度ジェンダー史学会年次大会にて、研究報告が採択され、発信の機会を得ました。さらに発信する場を拡げる企画を検討します。

6 献辞・謝辞

何度も厚かましく複数がお邪魔しても、いつも迎え入れ話して下さった語り手の皆様とご家族に心から感謝を申し上げます。とりわけ既に故人となられた10名の御遺族にも感謝し、ご冥福をお祈りいたします。